

Flow Analysis VI 見聞記

九州大学農学部 松本 清

熊本工大で Flow Analysis V が開催されて早くも3年が経過し、Flow Analysis VI が本年6月8日から11日まで、スペインのトレドで開催された。FA Vでは運営委員の一人として、初めてFA国際会議に参加させて戴いたが、多数の外国のFA研究者の活発な討論を通じ大変刺激になり、第6回会議にも是非参加したいと思っていた。主催者であるコルドバ大学のProf. ValcarcelとProf. Luque de CastroからFA VIの2nd announcementが到着したところ、愛知工大の酒井先生より「団体扱いで賑やかにまいります」というお誘いを受け、渡りに船の心境で喜んでプランに乗せてもらうこととした。

6月6日、11時成田集合。顔馴染みの先生方、初対面の先生方と一応の挨拶を交わした後、和やかに出発を迎えた。成田—マドリッド間ノンストップ便と思っていたが、モスクワ経由ということで思いがけずモスクワ空港で1時間ほど免税店を覗く機会に恵まれた。モスクワなど立ち寄る機会は一生無いだろうと思っていたので何か得をした気分になった。その日のうちに、マドリッドに到着、入国手続きをすませた後、直ちにバルセロナに飛んだ。前日深夜の就寝と時差ボケでだるい体に鞭打って、スペイン最大の海港都市であり、オリンピック開催地（1992年）でもあるバルセロナ市内を見学した。この地はスペインの産んだ天才建築家ガウディゆかりの地で、グエル公園中の建築物、聖家族教会等印象深いものばかりであった。モンジュイックの丘にあるオリンピック会場跡も奇麗に保存・整備され、この丘から眺める海の色は一際目を惹くものがあった。

6月8日、マドリッドに戻り、プラド美術館である有名なゴヤの「裸体のマヤ」「着衣のマヤ」を見学、そのタッチの違いの謂れを興味深く聞いた。午後会議場であるトレドに到着した。

夕刻、Registrationをすませ、8時20分から、Openingとなり、主催者側の挨拶の後、Prof. Ruzicka (Univ. of Washington) の開幕招待講演 "Flow injection bioanalysis - from sample to a living cell" が約45分間行なわれた。この時点で日本からの参加者が勢揃いした。

参加者（敬称略）は青木（大阪府大工）、今任（九大工）、受田（高知大農）、酒井（愛知工大工）、鈴木（京・都立大工）、桐榮（京・岡山大理）、成澤（立教大理）、松本（九大農）、本水（岡山大理）、八尾（大阪府大工）、山根（山梨大教）と随行者2名であった。

Prof. Ruzickaの講演の後、Get-together Partyの開幕となった。午後9時過ぎ

とはい えスペインの太陽は高く、日本の4時頃を思わせる中で和やかなパーティーとなり、夜12時過ぎまで交流が続いた。

9日は、9時より招待講演を含むOral Sessionを2コマ行い、ポスター発表(12:30~15:30、途中ランチを含む)、続いてOral Session2コマというかなりハードなスケジュールであった。10日、11日も発表のスケジュールは大体同じ様式であったが、講演内容については、今任先生(九大工)の御報告に譲りたい。

10日午後は、スペインの古都トレドの市内観光、最終日11日夕はBanquetが用意され、至れり尽くせりの運営であった。

最終日のBanquetはトレド旧市街の由緒ある建物の中庭で開かれたが、Opening Ceremonyなど堅苦しい挨拶など全く無く、自然に食事の開始となり、我々日本人は文化の違いを感じさせられた。この席では、Poster Session発表におけるポスター賞の授与も行なわれた。口頭発表、ポスター発表の別を問わず、欧米の方々のスライド、ポスターは目の醒めるような美しさであり、如何に自分の研究をアピールするか、というプレゼンテーションに対する意気込みがひしひしと伝ってくるものばかりで、我々もより一層の努力が必要なことを痛感した。

今回の会議参加は、FA研究の世界の動向に触れ、一線の研究者とDiscussionができ、交遊が生まれたことで大きな収穫であった。

それにしても、レストランで英語が通じず、メニューがさっぱり解らない中で、酒井団長の素晴らしいスペイン語に参加者全員大いに助けられた。ここに記してその労に深謝したいと思います。

